

“男女共同参画”とは、 家族解体を促す過激な政策!!

「しっぽを切られたキツネ」の話

イソップ童話に「しっぽを切られたキツネ」という話があります。

一匹のキツネが、罠にはさまれて、しっぽを切られてしまいました。

恥ずかしくて、もう生きていけないと思うほどでしたが、そのキツネは考えました。

「もしも、なかまのキツネぜんぶが、しっぽを切れば、自分は目立たなくなる。よし、みんなにしっぽを切るように、すすめてみよう…」

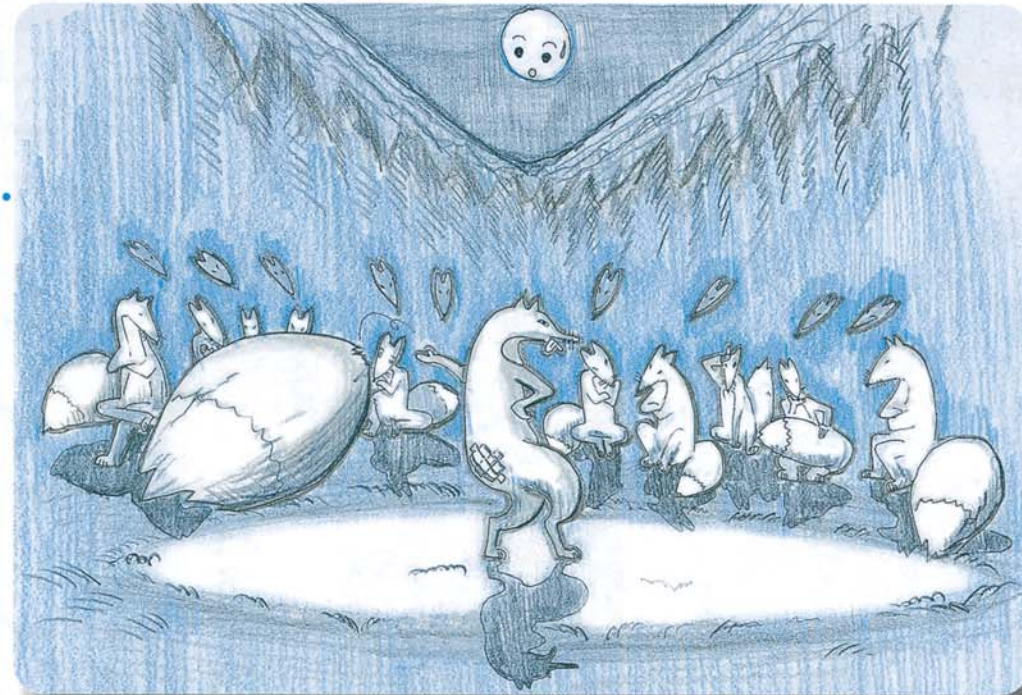
こう決心したキツネは、みんなを呼び集めて言いました。

「そんな長いしっぽは、みっともないばかりか、よけいなものがくっついては、重くてむだじゃないか。切ってしまった方がいいぜ」

すると、仲間の一匹のキツネが言いました。

「おいおい、きみ、そうやればきみが得をするから、そんなことをいうんだろう。そうでなければ、いうはずがないね」

—この話は、仲間のためを思ってではなく、自分だけの利益のために、仲間にくらげろ
うな忠告をする人に当てはまる話です。 (『イソップ童話・上』偕成社文庫参照)



現代版「しっぽを切られたキツネ」では…

文部科学省の委嘱で作られたパンフレット『新子育て支援・未来を育てる基本のき』の中には、家族について次のように記しています。

「『家族』の定義は1つではありません。……家族の形はさまざまです」「『ふつうの家族』『当たり前前の親子関係』というのは、思い込みに過ぎません」と。

このように、“男女共同参画”社会では、家族解体を奨励しています。

「異性が愛し合わなくても、同性で愛し合ってもいいんじゃないか」などと、同性愛者も含めた「性的少数者」の権利を主張します。また、「愛が終われば別れるというのが当然」だから、「がまんしてたのしくない夫婦を続けることはない」「離婚と少年犯罪も無関係だ」と吹聴します。しかし、それは本当に社会全体のこと、子供のことを考えてのことなのでしょうか。

日本人は、先祖崇拝を通して、亡くなった先祖を含めて家族と考え、子孫繁栄を願ってきました。先祖から自分、そして子孫につながる時間的な流れの中に自己を位置づけ、それが日本人の道徳観や倫理観となってきました。

“男女共同参画”は、こうした日本人の伝統文化や自然の法を否定する過激な思想なのです。

